文化庁月報
NO.332
1996 5

CONTENTS

特集／高度情報化時代の文化行政

巻頭言	高度情報化社会と文化	猪瀬　博	4
論文1	高度情報通信環境の中の博物館・美術館	高見沢明雄	6
論文2	芸能文化の発信における情報化の役割	上野　博	10
事例1	コンピュータ・ネットワーク上の展覧会 ——「アート・オン・ザ・ネット／インターネットの挑戦」展——	箕輪　裕	14
事例2	美術館における美術情報提供の課題と可能性について	深田　独	16
施策説明	文化情報の発信のための基盤整備 ——文化情報総合システム——	総務課文化政策室	18

連　載

- ●随　想／デジタル・ペンは剣よりも強し　山根一眞　20
- ●地域からの文化発信／博物館・美術館紹介⑭　茨城県立歴史館　22
- ●後世に残そう我が県の文化財⑭／福井県　一乗谷朝倉氏遺跡、明通寺三重塔　25
- ●芸術文化活動でまちづくり⑤　北海道・東川町「国際写真フェスティバル」　28
- ●著作権法講座Q&A／14　31

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

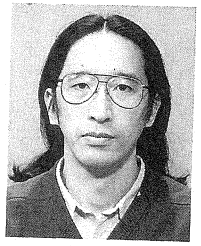
- ・平成7年度 芸術選奨決まる……32
- ・平成7年度 芸術作品賞決まる……35
- ・平成7年度 文化庁優秀映画作品賞決まる……36
- ・平成7年度 舞台芸術創作奨励賞決まる……37
- ・平成8年度 中学校芸術鑑賞教室公演日程決まる……37
- ・高等教育機関での違法コピー対策……39

イベント案内

- ・東京国立近代美術館フィルムセンター「日本映画の発見Ⅰ」／40
- ・奈良国立文化財研究所飛鳥資料館「山田寺東回廊」／41
- ・奈良国立博物館「東アジアの仏たち」／42
- ・東京国立博物館「中世の貴族」／43
- ・東京国立近代美術館「岸田劉生資料展示」／44
- ・第31回 人間国宝新作展／45
- ・芸術文化振興基金ニュース／46
- ・6月の国立劇場／47
- ・表紙解説／編集後記／48

高度情報通信環境の中の博物館・美術館

論文 1



東京国立博物館
情報管理研究室長

高見沢明雄

博物館や美術館という施設は、一般的な印象では十年一日、世の中の表面的な動きとは無関係に、独自のゆったりとした時の流れを刻んでいる、まるで別世界のように思われるかもしれない。しかし実際の博物館・美術館の現場では、情報処理や情報通信に対する関心が大きく高まっている。

利用者の側からすると、仕事が忙しい、交通の便が悪い、時間が合わない、体が具合悪い、など様々な事情から、博物館・美術館に行きたくても行けないという人たちは多い。そうした人たちにとっては、情報通信によって手軽にモノが見られるというのは福音であろう。また、あちこちの博物館・美術館の収蔵品を自由に見比べることも、実物ではなかなかかなわず、メディアの上ではじめて可能になる。

博物館・美術館の側でも、単に実際の作品そのものを見せる素材重視の立場だけでなく、最近は作品の見せ方に凝る、いわば料理重視の傾向が強まっている。この路線の延長線上にはメディアの利用が待っている。

また、情報通信事業者の側からみると、博物館・美術館の収蔵品は格好のマルチメディアの素材である。

こうした様々な思惑が重なって(?)、博物館・美術館の現場では情報処理や情報通信に対する関心が大きく高まっている。

もちろん、そうした関心の背景には、情報処理や情報通信が、実用のもの、手の届くものになった状況がある。

コンピュータの価格が、普通の電気製品に近いところまで低下したこと、テクスト処理の手法や画像処理の手法が（製品レベルで）大きく進展したこと、データの呼び出しや組み合わせの手法が進展したこと、大容量の記憶媒体や画像圧縮の標準化などにより画像を含むデータ作成・運用のコストが低下したこと、などなど。

こうした状況の変化はごく最近のことで、それを反映した博物館・美術館での利用例はまだ少ない。またこの状況の変化がさらに続くであろうことは明らかだから、手を出すタイミングが難しいことも事実である。

当面の大きな関心は、技術としては、画像データベースと通信、中でもインターネット（それもWWW：ワールドワイドウェッブ）に集中している。両者とも、技術的には従来からあったものだが、とくにここへ来て注目されているのは、それまで大変なコストと大げさなシステムを覚悟しなければ無理だと思われていたことが、容易に実現できるようになったからであろう。すでに従来の印刷・出版よりも、部分的にはコストパフォーマンスで勝っている。

その使い方としては、内部の事務処理は別として、まずは「広報」があげられる。WWW上の博物館・美術館を見ると、館への交通案内や営業案内、それに催し物（特別展）案内を載せるところが多い。WWWを利用する人と来館者とが、現状で、どれだけ重なっているかは疑問だが、博物館・美術館としてはとにかく知名度があがるだけでも見合うのかもしれない。

収蔵品の情報をWWW上で提供しているところもある。文字情報だけの検索型もあれば、画像つきで名品をいくつか選んで載せる館もある。画像の精度は、実際に展示場で見るよりも細部まで見えるほどの画像もあれば、コピーされるのを警戒してことさらに画質を落としたのではないかと思われるものまで、様々だが。

作品の公募から展示、入選作の発表まで、WWW上で展覧会を行った例や、従来の広報活動の枠を超えて、美術館教育に踏み込んで情報提供を行おうとしている例もある（別稿参照）。また、館独自で情報提供するのではなく、博物館・美術館ネットワークをWWW上で形成しようという動きもある。現時点ではまだ単に館へのリンクを張っているだけだが、これが後述する文化財情報システム・美術情報システムの計画のように、個別作品レベルの共通検索システムのような段階にまで発展すれば、画期的なものとなろう。

このように博物館・美術館からも熱い眼差しを集めている話題のインターネット、WWWだが、技術としてはまだ未熟な段階に留まり、安定性や安全性、利用料金の扱い方、社会的運用基準など、解決していかなくてはならない問題は多い。しかしその広範かつ開放的な接続性と画像の扱いや自在なリンクなど、博物館・美術館で情報の提供に利用する上では好条件を備えている。一部の博物館・美術館で行われていた独自のパソコン通信ネットワークは、徐々に置き換えられてゆくであろう。

さて、ある意味ではメディア先行で進んでいる博物館・美術館の高度情報通信化への対応だが、もう一度館にとっての意味を考えてみよう。

提供する情報の内容からみると、まず所在・予定情報を含む「広報」がある。広報であれば、経路は多いほどよいはずだから、あとはコスト次第ということになる。これに作品の所在・予定確認程度の検索サービスが加わっても同様であろう。

次に作品情報を詳細に提供する場合はどうだろうか。とくに画像を出す場合には、若干の問題があるのが現状ではないか。館の側の「出し惜しみ」の場合もあろうし、近現代美術では、作者の著作権を守らなくてはならない。もちろん、先に挙げた例のように、はじめからWWW上で公開することを前提に作品の公募を行えば著作権の問題は解決するが。

また、博物館・美術館は何よりもまず本物を見せるところと考えている館では、画像情報の扱い方次第では、抵抗があるかもしれない。

コンピュータで画像処理を加えることもあろう。変色・褪色した作品

特集 高度情報化時代の文化行政

を復元する試みはすでに行われていて、使い方次第では非常に有効である。研究のレベルでならば積極的に利用すべきものだが、一般利用者への提供となると、とくに美術系の館では議論があり得る（テレビ放映でも同様だが）。一方、考古・歴史系の館では、今後広く使われていくものと思われる。

情報の提供の仕方からみると、館内だけの提供から、単独の館外への提供、他館とのネットワークまで考えられる。

館内だけの提供ならば、従来の展示の延長線の上に位置づけることができる。また、情報通信網経由で館外へ単独で情報を提供するのは、従来の広報活動や出版活動の延長としてとらえることができる。

しかし、他館とのネットワークとなると、これは明らかに新たな局面を迎えることになる。やり方次第では館の境界を消して、仮想の巨大な美術館をネットワーク上に作ることにもなる。その場合、ここが図書館と違う点であろうが、博物館・美術館では各館の独自性・個性をいかにして守るかが重要な課題となる。

様々な考え方や問題はあるが、現代の博物館・美術館が、高度情報通信社会の洗礼を拒むことはもはや現実的ではないだろう。むしろ、その避けられない流れにうまく対処することが大事ではないか。

前述したように博物館・美術館の世界では、館ごとの個性が埋没してしまってはならないため、基本的に集中型のネットワークは向かない。幸いなことに、現在の主潮は、分散型のネットワークであるインターネットに向いている。

こうした状況の下で、文化庁の文化財情報システム・美術情報システムでは、インターネット上に各博物館・美術館が主体的に構築・運用するWWWサービスを基礎に、それらを横断的に検索する索引を上乗せすることで、分散型のネットワークを実現しようとしている。基本的には各館ごとの枠組みをとどめた仕組みである。

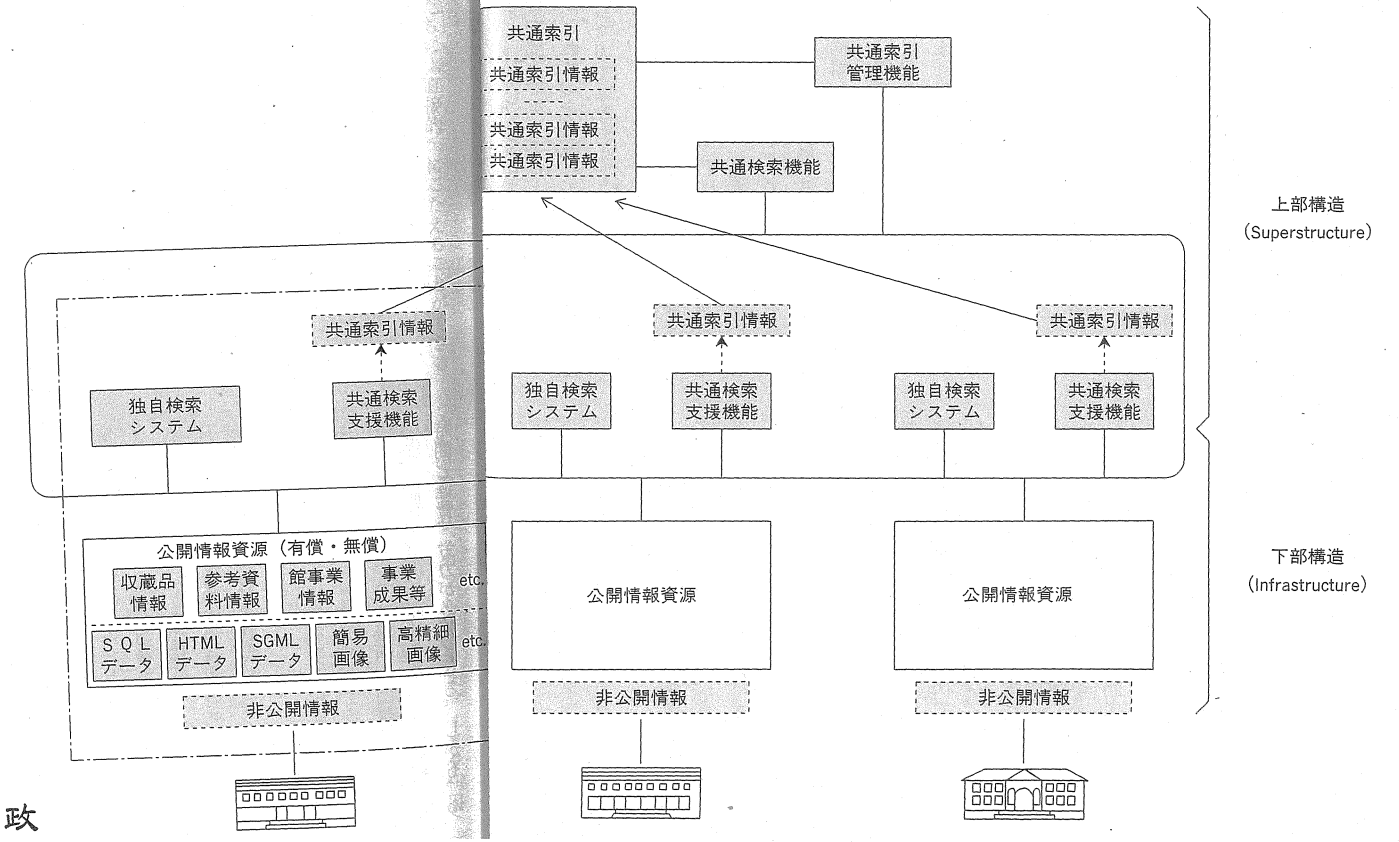
索引で見つかった作品は、利用者がそこを一回クリックするだけで、ただちに詳細な情報を見ることができる。実際には索引から該当する各館のWWWサーバーに跳んでいるのだが、そこはWWWが自動的に処理するため、利用者には負担がかからない。もちろん画像も各館で用意していればそのまま見ることができる。

各館の側では、索引の管理が要求されるだけで、それ以外の情報の組み立て方は全く自由である。各館の主体性を維持しながら、一般利用者にも博物館・美術館のスタッフにも便利な分散型の巨大なデータベースができあがることになる。

通信網上であまり作品を見せてしまうと、実際に館まで足を運ぶ人が減ってしまうのではないか。実物を見ないで済ます人が増えるのではないか。よそでは見られない作品を陳列するのが「売り」なのに、どこでも見られるようになってしまうと困るのではないか。等々杞憂の種は尽きない。

しかし博物館・美術館の収蔵品は、社会の大きな情報資源である。CD-ROMパッケージや、インターネットのWWW等のディジタル静止画像では、目玉の一つになっている。印刷物の世界では、美術図録の出版がコスト高から先行きが危ぶまれているのに対して、いわゆる「マルチメディア」の世界では、博物館・美術館の収蔵品は有望視されている。館でやらなくても、ハイビジョンミュージアムの例を見ても明らかなように、否応なしに業者の手が入ってくるのではなかろうか。社会の貴重な文化資産である。どうせなら自らの主体性が発揮できる形で対処する方が、博物館・美術館としては名分がたつのではなかろうか。

博物館・美術館共通索引の方式



表紙解説

重要文化財　藤倉水源地水道施設（秋田県秋田市）

撮影／三沢博昭

秋田市内各地への飲料水、防火用水の供給を目的につくられた施設で、明治40年に給水を開始した。写真は水道用のダムで、ダムによってつくられた貯水池により必要な水道水量を常時確保する仕組みである。このダムは、明治40年に竣工した直後に洪水等により被害を受けたため、設計変更が行われ同44年に改めて竣工したものである。

多くのダムでは水量が増加したときにだけ放流を行う形式だが、このダムでは常時水が上を越えて流れる「越流式」としている点に特徴がある。岩盤をコンクリートで固め表面を石張り仕上げとするが、コンクリートを使用したダムの初期の例で、表面仕上げも時代の特徴をよくあらわしている。上部に架かった鉄橋は、緊急時の放水作業等のために設けられたもので、これも設計変更時のものである。

当施設は、昭和48年にその役割を終えたが、ダム等の構造物等が良好に保存されており、我が国の近代化に貢献した初期の近代的水道施設の姿をよく知ることができ貴重である。

（文化財保護部建造物課調査官　後藤　治）

編集後記

2月の大雪の日。上野の東京都美術館で開催していたオルセー美術館展に行って来ました。雪の中、外で30分以上待って人、人、人……。改めて良いものに触れることに対する人々の渇望、芸術文化への志向の高まりを感じました。オルセー美術館展のような著名な展覧会で一流のものに触れることは貴重な機会ですが、それができる人は限られています。国立の博物館や地方の美術館で行われる展覧会も同様です。これは地理的な問題が大きな原因であるといえますが、人々のニーズに応じた的確な情報の提供が行われていないことや、文化に関する体系的な情報のシステムが整備されていないことも原因の一つであると思います。文化庁が進めている文化情報システムはこうした課題を少しでも克服し、文化に対する需要の高まりに応えるものとして期待できるものとなると考えています。さらに、人々の文化熱を刺激するものとなるでしょう。　（た）

文化庁月報　5月号（通巻332号）

平成8年5月25日印刷・発行

編　集－文化庁
〒100 東京都千代田区霞が関3－2－2
発　行－株式会社ぎょうせい
本　社　〒104 東京都中央区銀座7-4-12
本　部　〒167-88 東京都杉並区荻窪4-30-16
電話　編集　03(3571)2126
販売　03(5349)6666
振替口座　00190-0-161
印刷所－㈱行政学会印刷所

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価530円（本体515円）送料76円
年間購読料6360円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合せ・申し込み先
㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係
電話03(5349)6657（ダイヤルイン）

©1996 Printed in Japan
ISSN 0916－9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。